

# 目 次

<b>第1章 はじめに</b> .....	1
1. 自慢・愚痴・自己卑下を語る .....	1
2. 共感を示す .....	3
3. 本研究の目的 .....	5
4. 本研究の意義 .....	5
5. 本書の構成 .....	7
<b>第2章 共感的な反応とは？</b>	
—これまでの研究における共感発話の特徴— .....	11
1. はじめに .....	11
2. 共感の定義 .....	11
2.1 同意と共感 .....	16
2.2 本研究における共感の定義 .....	18
3. 共感を示す際のジレンマ .....	18
4. 会話の中でみられる共感的な反応 .....	24
5. 自慢・愚痴・自己卑下に対する共感的な反応 .....	32
5.1 「自慢」に対する共感的な反応 .....	32
5.2 「愚痴」に対する共感的な反応 .....	35
5.3 「自己卑下」に対する共感的な反応 .....	38
5.4 自慢・愚痴・自己卑下の特徴 .....	42
5.4.1 自慢 .....	42
5.4.2 愚痴 .....	43

5.4.3 自己卑下.....	48
6. まとめ.....	52
<b>第3章 分析の観点と研究方法.....</b>	<b>55</b>
1. はじめに.....	55
2. 分析の観点.....	55
3. 研究方法.....	58
<b>第4章 自慢に対する共感が対人関係構築に果たす役割</b> <b>—自慢の継続に貢献するための共感的な反応—</b> .....	<b>63</b>
1. はじめに.....	63
2. 先行研究.....	64
3. 分析対象となるデータ.....	66
4. 会話の流れ.....	66
5. 自慢を継続させるための方法.....	78
5.1 自慢の切り出し方.....	78
5.2 自慢の開始と継続.....	82
6. まとめ.....	89
<b>第5章 愚痴に対する共感が対人関係構築に果たす役割</b> <b>—愚痴の継続に貢献するための共感的な反応—</b> .....	<b>91</b>
1. はじめに.....	91
2. 先行研究.....	91
3. 分析対象となるデータ.....	93
4. 会話の流れ.....	94
5. 愚痴を継続させるための方法.....	108
6. まとめ.....	117
<b>第6章 自己卑下に対する共感が対人関係構築に果たす役割</b> <b>—自己卑下の継続回避のための共感的な反応—</b> .....	<b>121</b>
1. はじめに.....	121
2. 先行研究.....	123

3. 分析対象となるデータ .....	126
4. 会話の流れ .....	127
5. 自己卑下の継続回避の方法 .....	142
5.1 会話相手からの指摘を認めるための自己卑下 .....	143
5.2 会話相手からの提案を否定するための自己卑下 .....	149
6. まとめ .....	157
<b>第7章 「それな」による共感</b>	
<b>—相手の経験を認めるための方法—</b> .....	161
1. はじめに .....	161
2. 先行研究 .....	161
3. 分析対象となるデータ .....	166
4. 「それな」の直前発話 .....	166
5. 相手の経験を認めるための方法 .....	168
6. まとめ .....	173
<b>第8章 おわりに</b> .....	175
あとがき .....	181
参考文献 .....	183
索引 .....	189

## 第1章

# はじめに

### 1. 自慢・愚痴・自己卑下を語る

本研究は自慢・愚痴・自己卑下の3つの語りから共感の特徴を明らかにするものである。これら3つは、社会的な規範から考えると積極的に語ることが望ましくない語りである。しかし、日常生活において、私たちは次のように自慢や愚痴、自己卑下を語ることがある。

#### 自慢

A：そのネックレス、素敵だね。

→ B：そうですね？ 今、人気のブランドで入手困難らしいんだけど、  
彼が特別に取り寄せて買ってくれたの。

「自慢」は、語り手にとってはポジティブな経験を語る行為である。聞き手からの賞賛を期待する。しかし、聞き手にとっては、ポジティブな経験として受け止めることができない場合もある。聞き手にとっては、「自慢」が嫌みに聞こえて不快に感じることもある。

#### 愚痴

A：最近、バイトどう？

→ B：店長が俺ばかり怒ってきて、まじ最悪。

「愚痴」は語り手にとってネガティブな経験を語る行為である。望ましくない事態について嘆くことで、聞き手に同調してもらうことを期待する。語

## 第2章

## 共感的な反応とは？

## —これまでの研究における共感発話の特徴—

## 1. はじめに

本章の目的は、共感に関する先行研究を示すことにある。語り手の経験に対する聞き手の共感的な反応について、どのような特徴があるのかをみていく。2節では、これまでの研究における共感の定義を概観する。共感の特徴を捉えるため、2.1では同意との比較を行い、2.2において本研究における共感の定義を述べる。3節では、相手の領域とジレンマに焦点を当てる。4節では、会話の中でみられる共感的な反応について整理する。5節では、自慢・愚痴・自己卑下に対する共感的な反応の特徴を取り上げる。また、自慢・愚痴・自己卑下の特徴についても概観する。自慢・愚痴・自己卑下に関する先行研究は、各章(4～6章)でも取り上げる。6節では、まとめを述べる。

## 2. 共感の定義

「共感」ということばは、一般的にどのような意味で捉えられているのだろうか。ここではまず、辞書に記されている「共感」を概観する。

(Sympathy の訳語) 他人の体験する感情や心的状態、あるいは人の主張などを、自分も全く同じように感じたり理解したりすること。

同感『-を覚える』『-を呼ぶ』→感情移入

『広辞苑』第七版(2018: 757)

その通りと共に感ずる

『日本語源広辞典』(2012: 289)

## 第3章

# 分析の観点と研究方法

### 1. はじめに

ここでは、本研究における分析の観点と研究方法を取り上げる。2節で分析の観点を述べる。本研究では、共感的な反応の特徴に焦点を当てていくが、同時に語り手の自慢・愚痴・自己卑下の語り方にも着目する。3節では研究方法について説明する。

### 2. 分析の観点

語り手は自らの経験を語る際、単に経験談を語るだけではなく、聞き手に共感を求めることがあり、一方の聞き手も単にその経験談を聞くだけでなく、その期待に添う反応をしようとすることがある。本研究では「語り手の期待」と「聞き手の反応」に着目して共感発話の連鎖を分析する。本研究で着目するのは以下のような発話連鎖である。経験を語り、それに対して共感的な反応を示している場合である。

#### (1)

1A：昨日、彼に振られたの

2B：それは辛い

まず、「語り手の期待」に注目して関連する概念を概観する。次に、「聞き手の反応」に関する概念に着目する。最後に本研究における分析の観点をまとめる。

最初に「語り手の期待」に焦点を当てる。語り手は経験を語る場合、単に語るのではなく、聞き手から共感的な反応が得られることを期待してい

## 第4章

# 自慢に対する共感が 対人関係構築に果たす役割

## —自慢の継続に貢献するための共感的な反応—

### 1. はじめに

日常生活において、私たちは、どのようなときにどのようなことを自慢しているのだろうか。自慢は聞き手にとっては、心地良い語りとはいえず、ときには嫌みに聞こえてしまうこともある。しかし、それでも私たちはポジティブな経験や嬉しい出来事をつい他の人と共有したくなってしまふ。それは、自分のことを単に聞いてほしいという欲求だけではなく、相手に認めてほしい、自分のことを相手に知ってほしいという表れでもある。自慢の語り方によっては、それが聞き手には報告として聞こえ、自慢として聞こえない場合がある。反対に語り手は報告をただで自慢として語っていなくても、聞き手には自慢として聞こえることもある。ここに自慢を語ることと聞くことの複雑さがある。また、誰が、どのようなタイミングで、どのように自慢を切り出し、開始するかでその後のやりとりも変わってくる。自分のことについて自ら誇るよりも、第三者による褒めによって「自慢」が促されるほうが相互行為上のトラブルが起こりにくいことが報告されている (Speer 2012)。本研究では、自慢のきっかけを誰(語り手・聞き手)が作り、どのように自慢が開始されるのかに着目する。また、自慢の継続についても観察する。具体的には、自慢の語り方と共感的な反応の観点から自慢の特徴をみていく。

2節ではこれまでの自慢に関する先行研究を取り上げる。3節では分析対象となるデータを示す。4節では、会話の流れの中で自慢に対する共感的な反応について発話連鎖のパターンをみていく。5節では、自慢を継続させるための方法について述べる。6節では、まとめを行う。

## 第5章

# 愚痴に対する共感が 対人関係構築に果たす役割

## —愚痴の継続に貢献するための共感的な反応—

### 1. はじめに

私たちは、どのようなときに、どのような相手に向かって愚痴を口にするのだろうか。愚痴は社会的な規範から考えると望ましい行為とはいえず、相手に与える印象も好印象とはいえない。しかし、それでも私たちは愚痴を語ってしまう。では、なぜ愚痴を語りたくなってしまうのか。愚痴は聞き手がいることで達成される語りである(野中 2001, 野中 2007)。そこには聞き手に期待される反応がある。期待される反応が得られた場合はもちろん、得られなかった場合もいつかは愚痴を終わらせなければならない。では、愚痴はどのように終わらせればよいのか。本研究は愚痴をどのように続けるか、また終わらせるかに着目する。具体的には、愚痴の語り方と共感的な反応の観点から愚痴の特徴をみていく。

2節では、愚痴についての先行研究を取り上げる。3節においては、対象となるデータを提示する。4節では、愚痴に対する共感発話の連鎖パターンを捉える。5節では、愚痴を続けるための方法について述べ、第6節でまとめを行う。

### 2. 先行研究

ここでは、愚痴の性質、愚痴の語り手と聞き手について、先行研究を概観する。

野中(2007)は、愚痴は傷つきやすい発話であると指摘している。自分の失敗や弱さなどを語るが多くなるため、相手がよく知らないことを語ることで防御措置を取るといふ。野中(2001)は、聞き手への期待について注目している。愚痴をこぼす人は、「私の話を聞いてほしい、でも意見はしな



## 第6章

# 自己卑下に対する共感が 対人関係構築に果たす役割

## —自己卑下の継続回避のための共感的な反応—

### 1. はじめに

日常生活の中で、私たちは、自らのことを劣っていると語ることがある。例えば、物事がうまく進まないときに自分の能力不足だと思ったり、他者と比べて劣っていると感じたりするなど、様々な基準を用いて自分を低く評価する。自分が劣っていることを独り言のようにつぶやくことがある。それだけではなく、他者に自分が劣っていると聞いてほしいときもある。自分が劣っていることをわざわざ他者に伝えるのは、聞き手に聞いてほしい・認めてほしいという気持ちの表れではないか。つまり、聞き手に何らかの反応を期待しているといえる。しかし、聞いている側が、期待される反応を示すことは容易ではない。なぜなら、扱っている内容が会話相手の劣っている部分であるからだ。同調的な反応を示した場合、相手の能力が低いことを認めることになるかもしれない。一方で「そんなことはないよ」と否定的な反応を示した場合、語り手に「聞き手に自分の気持ちがわかるはずがない」と思われる可能性もある。

次の事例をみると、自己卑下に対する反応が容易ではないこと、また慎重に反応を示そうとしていることがわかる。

#### (1) iPadの紛失 A男×B男 (クラスメイト)

- 1 A: 自分のだらしなさがちょっと(.) [身に染みるよね。  
 2 B: [wo::  
 →3 B: そ(h)れは(h)hu.h[hそれは .hh もうわ(hh)らうしか  
 4 A: [やばい  
 5 A: [やばい

## 第7章

# 「それな」による共感

## —相手の経験を認めるための方法—

### 1. はじめに

ここでは、共感的な反応を示す際の「それな」という表現を取り上げる。近年、若者の会話で「それな」を耳にするようになった。一見、どのような事柄に対しても相槌を打つときのような感覚で使用しているように聞こえるが、会話に耳を傾けると使い分けがあるように聞こえる。

そこで本研究は「それな」という表現による反応の特徴を明らかにする。まず、「それな」の直前の発話を細かく観察する。次に「それな」という表現を用いて反応することで、会話相手にどのようなことを働きかけているのかを分析する。

2節では、「それな」についての先行研究を概観する。3節において、対象となるデータを示す。4節は「それな」の直前の発話を捉える。5節では、相手の経験を認める方法を述べ、6節でまとめを行う。

### 2. 先行研究

まず、これまでの研究において「それな」がどのような意味で捉えられているのかを確認する。次に、やりとりの中でみられる「それな」に着目している研究を概観する。

「それな」は『三省堂国語辞典』第八版(2022)では、以下のような記述である。

相手の指摘してきに同感することをあらわすことば。そうだよね  
『あれけっこういいね』『ー』

『三省堂国語辞典』第八版(2022: 860)

## 第8章

## おわりに

ここまで、自慢・愚痴・自己卑下に対する共感的な反応の特徴を述べてきた。また「それな」という表現にも着目した。本章では、これまでのまとめを行う。

第1章では、本研究の目的と期待できる効果について述べた。また、自慢・愚痴・自己卑下の3つの語りについて説明した。更に、共感を捉えることで、語り手が聞き手に期待する反応と社会的規範の特徴を明らかにすることを目的としたものであることを述べた。期待できる効果は、円滑なコミュニケーションである。

第2章では、まず、共感に関する先行研究を概観した。そこから、共感と同意の特徴について比較し、本研究における共感の定義を提示した。本研究では「相手の考えや気持ちを理解して、相手の期待に添おうとする態度」を「共感」と定義した。共感的な反応を示す際に、関連する要素として1) 道徳的な判断 2) 相手と自分の経験 3) 相手と自分の立場があることを示した。また、自慢・愚痴・自己卑下の特徴についての先行研究を概観した。

第3章では、分析の観点と研究方法を示した。分析の観点は「語り手の期待」と「聞き手の反応」であり、関連する概念を取り上げた。また、語り手の期待に聞き手が合わせながら応答を行おうとすること(Sacks 1987)との関係性を提示した。研究方法については、本研究の目的を達成するためには、会話分析の手法を用いる必要があることを述べた。

第4章では、自慢に対する共感が対人関係構築に果たす役割について、大学1年生の初対面会話と知人会話のデータを示しながら、主に自慢の継続に貢献するための共感的な反応の特徴を分析した。自慢は、社会的な規範から積極的に語ることを控える性質があるが、それでも私たちは、良いこと